梅澤

門 遠へ 13
別 1807
巻 18

正史実傳 いろは文庫巻之十八

江戸 爲永春水著

第三十五回

今此章にあるせしハ諸書の中より実するなるべく思ふことを自筆の類ひをうつし出されバ娘の方ハ公にかなハぬ様にもあるべきなれど凡ひかしの物語ハ千世の体を深く考へ推量りてとを面白しを思ふ條下ハありぬべし但し燒り[illegible]なかれバ公なく讀ゐふ人々ゆハいかるかん史兵書に云人に

[illegible]

霊あり生を離て魂を守り死に臨んで屈せず正道順路
なるを神霊といふ生ある中に人を救ひ人を立て仁義を守り
し死に臨ても道をまげぬ魂魄残りて人をまもる事ある神
霊といふ大星由良之助が誉りしにハ一社の神霊とまつらるゝかね
べし六十余州唯か此人を尊とまざらん只其もとに見るべし
あら忠貞仁心の深きを思ひはかりて其身の鑑となし玉へ
鳥の跡をうつす筆さへ拙なく
むかしふうなる人もありやせ

狂訓亭

陽光院の歌

ちに写し出せしハ後鳥の後に京都紫野大徳寺の
陽光院の使僧人をハしたる返書にて大里氏の
自筆なり

兎に角に思ひハ大なる身の上に
志ぢし迷の　こゝもとてもなし

這ハ婦女達の看てよろこぶ類ひにあらねど凡男士の世の
跡ハ空に書殘せし反古までもなつかしく其ときのな
をも思ひ出ゝるゝ所為ならばや

花の雲空も名殘にありけり　大星良權
世の中ハ春の巨燵の心なり　同　良金

ときも辞世にてありけるか

二百里や我翠葉ハ菊の匠　木村貞行

まこ蟻蜂祿といふ書に

大星の辞世

水にうかる花を藻くずに浮く人て
匂ひたかりを庭の梅が枝

今はたやこゝの葉草もありけり
何の為にて露むすぶらん

同書に一説あり義堂の為にハ此書にうつし出すも
心よりかぬるまでど亦主君なる人の臣下に晴なく
非道なるハ家國を亡し子孫の絶るゆ和漢にその

例も少なからず塩谷家の滅亡も浅き怨念の行為
なりといふ夫ハ大丈夫魂の人ハあざけり笑ふべきゆに仙
たまど無失の罪なんどに晴なき礼を遂なバ怨とあの残
りて常りをせまじきものゆハあらじ主君の威光と上に
立たる人の勢ひに募りて臣下を恥しめ下を晴なく
するハ頓て無身も家國も亡びたるゝと用心なり支
支ぞかし亦上に立たるゝ人ハ常に下を恵ゝなんまこと
ゆふが何よりか難ぬてものなり然まどもひとハいと思ふに

大星討入ハ以
前所々へ贈ル
遺書或ひハ辞
世ハ認む

理にくらきものにて不便するものどもありと思ひたるハ
ねバ復立るゝ事のミ多かるべし夫を奈何といへバ愚
なるものゝ癖として是を仇にて報じ義悲を不足に恨
利鋭に呆なき輩多けれバ仁心なる君も覺相を尽し
恐ふて忽地惡ミを止めて刑罰を烈しくせらるゝもの
なり徳も塩谷判官にハ臣下を憐ミ民を惠ませられ
あるど言貞より三代以前の君の以時に不忍の誤り
にて清直の家臣を非道に刑罰に行ひたるひしを

変なりけり 兄より蟻塗線 ○ことに塩谷稲目正の時代に最緯義
なる家臣なりて金奉行を勤めなりけるが或時今流に
盗賊入りて千両箱一ツ失なりしかバ種々に詮義せら
るれども一向に知れず兄に依て金奉行の不忠より
發りしまなりと嚴しく手役をもつて以咎めなり
けれバ彼者の返答に拙者が預りし役義なれバ則
我等が盗人なりと申けれバ其の通りを稲目正に申
上れバ大ひに怒り恐ひ以のかの返答不届に極なり

宝あし彼が盗ミし覚へがある由ゑに左様の大様を
中にもなかる恵度刑法に行へとて遂に其役人を盗
人に宝あらしてより然れども其人ハ些も知らざるを
にて只盗まれてるを越度とて親恵を有れ城の祭
ゆゑを恥て盗人に等しき不恵なりと善人しを不法の
様に呼とらせられ猶憎て盗賊の當人と格あ
らるゝ事士道の恥辱豈情と思ふ恵の常を
なさでなるべきや偖も城下の馬場へ彼人を引出し

柳の大木に縛り付て面をさらし家中の人々町人
百姓に見せて盗人よ盗賊よと大勢に詈り傍らせ
恥を与へ其後一日に指を一本づゝ切捨させ其旦の指を
廿日のゝるに切落させたり如形なれバ国中こぞく此人を
盗賊の大罪人と思ハね者もなし嗚呼此士の薄命と
いふも隠りなりいかなる前世の宿業にて此災難に悪
名を流し日毎の苦痛をせしるぞ是に連添ひし
妻子親族の悲しミ恥かしさと悔しさハ譬る物もなかる

べし此時にいたりて彼士ハ血だらる眼をいからして齒を
喰ひしばり我役義に付ての兼畧と咎めなかば是非
なけれど盗賊と定められて此刑罰に行はるゝ事なれ
なり金を盗ミし者ハ外にあるべし頓て我明白なるを
知らせんぞ武士に悪名を究めしハ無念骨髄に入て
忘るゝ事なるまじ見よや我ハかゝるゝ當家の恥辱と
なり塩谷の家名を絶さずに無べきの思ひ知らせるぞ
思ひ知れと詈り狂ひて息絶けるを見る人ハ身の毛立て

ふるひおのゝき怖れぬものハなりしが夫より後に雨の歌の
陰くとなる折からハ青くとなる色の火の燃より馬場の東
西を飛めぐり苦しげに復立しと思ひなく変にて。まだ
洗れぬうまだ亡びぬう頓て絶果るぞ見よや見よやト
いふかと思へバ志ハがれたる変にてうらくと笑ふ怖しさ
心付ぎして通りかゝるとなる者迹なるから怖く振りかへり見
れバ手足の指先より血を流し鬼火の光り物ぞ
怖ろしげなる顔のありくと近付バ正体を失ひし者も

多うりしとぞ夫より慈悲なる人の不便に思ひまし幽
灵の法事を修行せしが主殺にや怨灵の法にも術に
止まけるが其士の妻夫の罪に行ハ出しより三十二年目に
当りて同じ月日に塩谷家ハ滅亡に及びしといふ
這ハ花岳寺の方丈の因果ものがたりにせられ
志と蟻蟀深の説ありまことに武士の深き
怨恚ハ然もありけるにやまさまじくも怖しき
事なりけり

第三十六回

今爰に説く物語りハ判官在世の事なりしが本國
より鎌倉在番の諸士の多うる中に秦胡平太と
いふものなり折しも弥生の上旬とて四方の桜も時知り
顔にかゝろび初て春風の身にかゝくと来る頃ハ人の
心も自ら浮立ち中につきてうを出かどよりして長
世の観音開帳とて群集の来詣胡平太ハ國元
より辺き頃来し者にて鎌倉の繁花弥らし

けれバ勤仕の隙を見合ハせて草履を一個を召
連れ先観音に参詣せんと途中まで出かりしが
ふと同役へもふし意べき大切の用を思ひ出しければ
矢立を取り出し冀紙に委細を認め供の男を
呼び近づけて　胡「コレ　そなたハ大義ながら此手紙を持て
一ト走りお屋敷へ飯り大警氏へ慥に届て言わやれ
ツイ出がけに差急いで行要のものを失念いたしこ　供「
ヘイ左様ならバ此お手紙を大警さぬハさ・上まれ

何ぞ此返るのでも　胡「イヤ〳〵返るのを聞くにハおよだぬ
さし意て直に来やれ　供「ヘイ〳〵史でハ貴公さぬハ此
茶店にでも所乃入まれか　胡「十二　そろ〳〵と往つて見
ゆう先達て鴨野氏と同道で来つたから大きな道も
覚へて居るゆゑ徐かに歩行て居るうちにハそなたが
追付て来るでなかろう若夫ともに途で逢ハさしバ
観音堂で待合さう　ト言ふを聞捨供人ハ元来し
方へと走り行く　先より胡平太ハ只一個繁花の

去地に別ぎるゆゑ群集の人を左処へ除け右処へ
除けつゝ行くうちも稼て箇様な場所にては懐
中物に気を付よト朋輩どもがおしへしまゝ只夜
便と懐中に心を付つゝ往くかどに魚がね道もあ
となく長谷の地内にいたりし折しも年頃四十
だらりにて木綿廣袖に丸か月代一僻なるべき
大男酒の機嫌が道幅も狭しを歩むちどう呈
史と見るより片枝へ除けんと為たる胡平太を田

舎武士とや悔つけん然と先より行当り 大男へヤイ
二本坊めん此廣い大道を明盲じやアなるべし何で
此身に突当つゝやアグつこト喧嘩買ふに出合はれ
胡平太も念然とせしが素より温和の生涯ゆゑ
胡へイヤ十二然と為ることでハなし寔に互ひの出合ごしら
行当つゝハ此身の寡相気に障つゝたら許して呉
つゝやまと 大男へ十二寡相ごと面白人盗賊を為ても
寡相とさん言やア事が滅ひかイ今突当つことき

此身の懐へ手を入れ出さうと為るこのを見て慮てこそ
其二種ハ人おどし武士と見せかけて汝ア是考を
ちたらくなト言ハれて胡平太面色変りあのまゝ急
外と刀の柄に手を掛んと為るとりしがイやく箇様な
妄法者手にかけたりとて詮ないすそのうち厳の
お名前まで出るすなはバト思按を歪し胡八ハ
とりやそるこにハ酒がるてこな余ハど機嫌と見へる
ハイ何るも此身がなやまり往来中ゆゑ人も立

宮う宜程に了第為やまト内端に言ふハどつけ
ながり大男十二酒がるてこ大きにお世話ぞ此身が残で
呑む酒に汝が笑顔を受るものか。ヤイ何ぞ其面ア
なんぞと言ふと刀の柄アひねくりまハして人見掛に
さて種の物なら大かた中ハ竹篦ぞらうこの近
ゐで名のうまて樗甫頭の強八さゑが種の物が
おそろしさに仕掛こ出入を止ると言ひちやア仲間の
奴等に面が立ね人四の五の言ふにやア及バねへから見せ

歌川
強八が喧嘩
買ひ暗ふ
奇縁哉
結ばーむ
奉

かけに着き大小も羽織も袴も手所へ脱ぎ盗
械の正体をあらはして平跨踞ゑら許して遣らう
私う言はまるのが口惜かア砕とも突とも勝手に
為ろ強八さまの御手解に故等が刀が立つものかト
言ひつゝ毛尻を引まくり胡平太が目の前へさし
つけらまて堪忍も寄う是までと刀の鍔元へかゝ
げて既に抜んと甘し打しも物見高なる群集の人々
相手は武士今一個は各に聞へたる悪者ゆゑこの

おさまりは如何ならんと皆手に汗を握りつゝ後ひざう
するだろうにて止めんとする者もなき其人立の後ろ
より「アレマア待ちてト言ひながら殿の人を推分通し
なけ現はまた出たる一個の處女胡平太の手に取り
すがり 娘「お援の立は御尽理でござるまたがまちきが
お袋をいらしまたから何率御手なるまとめてト言ふを
強八吏なんぞ 強「逢ごと思やア お民ごな汝が様にて
吏じやア私へ入らざる世活ごまた所放せ 民「アマア

お茶もめつそうなお武士さまにそんな事を言ひて
涙ものうな 張へ 涙ひも涙まねんも入るもんかコレよく
咬けヨ 昨夜もあるをつるく打たくらはれ素廣袖一
枚で寒さア寒し 随神の茶で 天ンつく 欣こわろ 解
機嫌手茶の店へ寄めて 何ぞ元手になる物でも
いこぶり出そうと思ひ 母公だりで手茶ハ呑
ぎヨ帰るのを待めて居たら 又母公がお宮まりの
お談義もうる其ト 狗くそを悪く帰る 及此二本

いろは十八ノ十五

坊が実めうつこから出入をすらじめて居る所を汝に
邪ア アさまてなるものか 何でも盗賊に遠くねん
泥坊ご泥坊ごト寝きたるをおしまづめ 民へアレサ
伯父さんお茶ハマアそんな悪い知に何時おまりご
此方が四了笥 涙けまバとそ 涙せうなものく那
お刀がお茶の目にハうたらないのか 張へ 斎帰め
行篦で人の骸が硬まるものかイ 何でも懐へ
手を入れらまて 訳をつけねんじやア 了笥さま

ねえ　民へアレモウ　お前も強情ご子ヱト言ひながら
髪にさしたる浅ろざしの簪を抜て　民へお前も
然う言ひ出しちやア　只ハお帰りでもなるまいが
元ハと言へバ私の店へ無心にお在のが出来ない
からの復立で形ういふるまいなのごから手元
手と申らを手たいけれども今実ハ持合がない
から是をどふとも宜ゆうにして速く何処ぞへ注て
お呉れト言ハれて強八つくづくと思ひて見れバ此

出入言ひ募りて見た処がなんまり物にも成まりも
なく品に仍てハ抜かねね那武士が顔ろうに只ハ
立流に叩けども心に五分の恐怖をいさけバお
民が言葉を幸ひに冥い退ちかとおもふにぞ一本の
簪でも売らぬハ損と手に受ひてちまいと同方を
引て見ながら　強へさつたりふめねへ代物ごが
手前がなんまり気を探から此場ハ是で後して
無るぞ命冥加な盗賊めトへらぞ只を利ながら

人立の中を潜り抜けたやくも彩を隠しける
お民ハ袮を見おくりながら胡平太の茶に小
便をかゞめ　民へ嵯貴公ハ憎い奴とお猶立でござい
ましたらうに此了簡なまちて下さいまして寔に寔
なりがらふでございまれお稽をもふしよくたいゆも寔ハ途
中で人立もなり私の店ハ此かし先でございまれから
鳥波お呼んなまちて下さいましト言ひつゝありなく
狂ふ此ぞ胡平太も否ミかねて後につきて行程に

寔に群集の人々が　「コウなの武士も余ぴど乱の
宜い男じやア　ねへか此身ごと先の野郎を先罷帰
ちやア為ねへけれども　「十二なりまが真正の武士サ
今なりまとて抜て見る甘へ　脇令砍得になるまでも
なんまり巻こ咄しだハねへハ子ぞ行をおとなしく後
ちこ所ハ余程落付こものサ　「俤那処へ那娘が出
ねへとなるかしい処ざぜ　「遠へねへ　此身ア武士より處
女の方が肝ぬぎ年ハ廿ゝ十六だりぐが容貌と

言ひ取りまへしとゆひ随分那なら情人にもなりて来る
まるの ●「へンお前へ来る気でも来顔をしじやア向へて
真平ごトヨ ▲「おきやゆがまかゝゝトキニ那娘が武士を
店へ連て仕つて分振まるごらう分ごろ気にまへぜ
●「十二来訳ハ七編に委しく出たといふまごろ出たら
らバ迷く倚て見る其直に訳がまつりやすト帰
たらぐ西東おのがまにく別まける

正史実傳 いろは文庫巻之十八了

梅澤